

『新生』とその周辺

橋 浦 史 一

一

大正元年十一月『新潮』に発表された島崎藤村の短篇小説「出発」に、「心を起さうと思へば、先づ身を起せ」というニーチェの言葉が記されていることは、和田謹吾氏が指摘している。⁽¹⁾この言葉は、新生事件の中にあつて、フランスに渡り、その後、藤村の手によつて書かれた感想紀行文『海へ』の冒頭にも記されることになる。感想紀行文『海へ』は、『平和の巴里』、『戦争と巴里』の通信の後に相当する、フランスへの往航と復航の「航海記」ともいふべき作品である。その冒頭にニーチェの先の言葉が記されると共に、大正九年九月二十五日から翌十年一月十二日まで『朝日新聞』に連載された「エトランゼエ」、すなわち大正十一年九月に刊行された感想紀行文『エトランゼエ（仏蘭西旅行者の群）』第五十五章にも次の記述が見られる。

『その哲学科の大学生はアリエスといふ名の仏蘭西人です。』

(中略)『そのアリエス君はニーチェの哲学書でも読もうといふ人でずせ。(以下略)』

藤村がフランスの地でニーチェに出会つてゐることが記されてゐる。

藤村とこま子との関係が始まつたのは明治四十五年六月上旬の頃

からだと言われている。この前後の時代的情況を見ると、明治四十四年一月に、生田長江訳のニーチェ『ツァラトゥストラ』が刊行されている。その『ツァラトゥストラ』には、「訳本ツァラトゥストラの序に代ふ」として、森鷗外の「沈黙の塔」が付されている。明治四十三年三月の夏目漱石の『門』の題名決定から、大正元年十二月より東西の『朝日新聞』に連載された『行人』中のニーチェの言葉の引用まで、この時期の鷗外作品も含めて、各作家のニーチェの思想への関心には、注意する必要がある。新生事件とニーチェの思想との関わりについては、和田謹吾氏の指摘があるが、和田氏が注目した中沢臨川の小説「嵐の前」には「ツァラトゥストラ」の名が見られる。「嵐の前」に対して『新生』中に見られる「嵐」の語が、ニーチェの『ツァラトゥストラ』はこう言った⁽²⁾を象徴するものであることの指摘についてはすでに論じたことがある。時代思潮としてのニーチェの影響は、新生事件を考える上で重要であると思われる。後、藤村は、感想集『市井にありて』に収められた、「芥川龍之介君のこと」で『新生』について触れ、次のように述べた。

当時私は心に激することがあつてあゝいふ作を書いたものゝ、私達の時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見ると、生きたがらの地獄から、そのまゝ、あんな世界に活き返る日も来たと言つて見たいつもりであつた。

藤村の言う「私達の時代に濃いデカダンス」に、ニーチェの思想が関わっていたことは充分考えられることである。

『新生』第一卷二十七章に、次の一節がある。

『岸本君。』と元園町は酔に乗じて岸本を励ますやうに言った。
『君も一度欧羅巴を見ていらつしやい……是非見ていらつしやい……もし君が奮発して出掛けられるやうなら、僕はどんなにでも骨を折ります……一度は欧羅巴といふものを見て置く必要がありますよ……』

岸本は黙し勝ちに、友人の話を聞いて居た。どうかして生きたいと思ふ彼の心は、情愛の籠つた友人の言葉から引出されて行つた。

「元園町」とは、中沢臨川のことである。そして第一卷第二十八章には、「友人は好いことを言つて呉れた。是以上の死滅には自分は耐へられない——彼は自分で自分に言つて見た。」とあつて、その後次の一節が示される。

海の外へ。岸本がその声をハッキリ聞きつけたのも帰りの車の上であつた。あだかも深い『夜』が来てその一條の活路を彼の耳にさゝやいて呉れたかのやうに。すくなくも元園町の友人が酒の上で言つた言葉から、その端緒を見つけて来たといふだけでも、彼に取つて、難有い賜物のやうに思はれた。どうかして自分を救はねば成らない。同時に節子をも。又た泉太や繁をも。斯の考へが彼の胸に湧いて来て、しかも出来ない事でも無いらしく思はれた時は、彼は心からある大きな驚きに打たれた。

この「海の外へ。」が、フランスへの旅立ちを記す感想紀行文『海へ』の題名につながっていることは容易に想像できる。後に「嵐の前」を書く中沢臨川が関わっていることは重要であろう。こ

の場合、「芥川龍之介君のこと」に示された「デカダンス」の内容については、『新生』第二卷第七十二章に描かれた次の叙述を知っておく必要がある。

岸本が浅草時代の終にあたる自分の生活をデカダンの生活として考へるやうに成つたのも、あたかもその生活の中に咲いた罪の華のやうに節子を考へるやうに成つたのも、それは彼が遠い旅に出てからずつと後のことであつた。

そして『新生』第一卷第二十九章にも、「一切を捨て、海の外へ出て行かう。」とあつて、「岸本は元園町の友人へ宛てた手紙を書いた。」と記されている。又、第二卷四十七章には、「大阪へ用事があつて序に訪ねて来たといふ元園町の友人を、もう一度神戸で見るとも出来た。」「海は早や岸本を呼んで居た。」とある。感想紀行文『海へ』の冒頭に記されたニーチェの言葉のことを考えると、後の中沢臨川の手になる「嵐の前」と、新生事件との関わりは、どうしても避けて通ることのできない問題であると言わざるを得ない。

ところで、『新生』第一卷七十五章に次のような叙述があらわれる。

岸本に取つては旅の心を引く一つの事蹟があつた。他でもない、それはアベラアルとエロイズの事蹟だ。(中略)アベラアルとエロイズの愛。何程青年時代の岸本はその奔放な情熱を若い心に想像して見たか知れない。あの学問のある尼さんのためには男も捨て僧職も擲つたといふアベラアルの名は何程若かつた日の彼の話頭に上つたか知れない。

そして次のように続く。

旅の鞆に入れて国から持つて来た書籍の中には昔を思ひ出させる英吉利の詩人の詩集もあつた。その中にあるアベラアルとエ

ロイズの事蹟を歌つた訳詩の一節をもう一度開けて見た。

この後に英文で書かれた詩の引用があり、次のように記される。

東京下谷の池の端の下宿で、岸本が友達と一緒に斯の詩を愛誦したのは二十年の昔だ。(中略)あの敏感な市川が我と我身の青春に堪へないかのやうに、『されど去歳こぞの雪やいづこに』と吟誦して聞かせた時の声はまだ岸本の耳の底にあつた。

この「アベラルとエロイズ」の叙述は、後第二巻で描かれる、「岸本」と「節子」の救いへの志向を示す事柄の、伏線の役割を荷っている点で重要である。⁽³⁾

そして再び『新生』第一巻第八十八章にアベラルとエロイズの叙述があらわれる。

岸本はアベラルとエロイズの事蹟が青年時代の自分の心を強く引きつけたこと、巴里に来て見るとあのアベラルが往昔むかしソルボンヌの先生であつたこと、あの名高い中世紀の坊さんあたりの時代から今のソルボンヌの学問の開けて来たこと、それから巴里のペエル・ラセエズの墓地にあの二人の情人の墓を見つけた時の驚きと喜びとを岡に語つた。

この文章は次のように続く。長くなるが引用してみる。

『(前略)柳博士に、隣に居る高瀬君に、僕と、三人でペエル・ラセエズを訪ねて見ましたよ。なかなか好い墓地でした。(中略)二人の寝像が御堂の内に置いてあつて、その横手のところには文字が掲げてありました。斯の人達は終生変ることのない精神的な愛情をかはしたなんて書いてありましたつけ。まあ比翼塚のやうなものですな。でも君、青苔の生えた墓石に二人の名前が彫りつけてでもあつて、それを訪ねて行くんなら比翼塚の感じもするが、どうして其様なものぢやない。男と女の

寝像が堂々と枕を並べて居るから驚く。「流石さすがアムウルの国だ」なんて、高瀬君が言つて笑ひましたつけ。(中略)『しかし、カトリックの国でなければ見られないやうな、古めかしい、物静かな御堂でしたよ。御参りに行くやうな人も君、沢山あると見えて、その御堂を圍繞とりまいた鉄柵のところには男や女の名がしばいに書きつけて有りましたつけ。彼様いふところは西洋も日本も同じですね。皆あの二人の運命にあやかりたいんですね。』

フランスに渡つた「岸本」が、その地でアベラルとエロイズの事蹟に深い関心を示すようになる経緯が記されている。ニーチェへの関心とのかかわりの有様が注目される。

つけ加えておくと、『戦争と巴里』の「ある友に」の第一章の「シャル・モオラス」について書いた「ある人」の言葉の中に「ニイチェ」についての言及を見ることができ、又、感想紀行文『エトランゼ』第八十八章の「ニゼット・ジュバン女史」の話の中の言葉にも「ニイチェ」への言及を見ることができ。

二

感想紀行文『海へ』の第一章「海へ」の二には、ボードレールの「秋の歌」の一節が引用された後、「斯の私の愛誦した歌の中の文句にあるやうに、北極の果なる太陽のごとくやがて紅くしてしかも凍り果つる唯一つの石に過ぎないであらうとは、最もよく私が心こゝろ胸の嘆きを言ひあらはしたものであつた。」と記されている。

「秋の歌」は、IとIIから成るが、藤村が触れているのはIの部分である。次に阿毛久芳氏の引用する阿部良雄訳でIIの部分を示し

てみる。

II

切れ長のあなたの眼の緑がかつた光を、私は愛する、／優しく美しい女よ、だが今日は、何もかも私には苦く、／何物も、あなたの愛も、瀟洒な居間も、煖炉も、／私にとっては、海の上に照る太陽には如かぬ。

それでもなお私を愛したまえ、心優しい女よ！ 母となりたまえ、／恩知らずの者のためにさえ、邪まな者のためにさえ。／恋人にまれ、妹にまれ、輝かしい秋の、または、／沈む太陽の、東の間の和やかさとなりたまえ。

なんと短い務め！ 墓は待ちうける。貧欲な墓！／ああ！ 許したまえ、きみの膝の上にこの額をおき、／灼熱の真白な夏を惜しみつつ、暮れゆく季節の／黄いろくやわらかな日射しを味わうことを！

感想紀行文『海へ』全五章のうちの第一章「海へ」は、大正六年四月の発表であるが、内容は、藤村の渡仏前の事柄が記されている。これと照応するように、大正元年十二月『文章世界』に発表され、感想集『後の新片町より』の巻頭に置かれた「秋の歌」にも、「ボードレールの到達した心境」に触れる中で「秋の歌」について示されている。そして『新生』第一巻第十一章にも、ボードレールの「秋の歌」について、「あの赤熱の色に燃えてしかも凍り果てる北極の太陽に自己の心胸を譬へ歌った仏蘭西の詩人ですら、決して唯梟のやうに眼ばかり光らせて孤独と悲痛の底に震へては居なかつたことを想像し、その人の残した意味深い歌の文句を繰返して見て、

自分を励まさうとした。」と記されている。周知の「節子は極く小さな声で、彼女が母になつたことを岸本に告げた。」という一文は、第一巻第十三章に記されることになる。藤村とボードレール、新生事件の発端の時期と、ボードレールの「秋の歌」の関係は充分注意されるべきである。

ところで、『新生』第二巻第一章には次のようである。

巴里に滞在中、東京の元園町の友人の家からわざわざ送り届けて呉れた襦袢は随分役に立つて、長い冬の夜なぞは洋服の上でそれを重ね寛濶な和服の着心地を楽みながら机に対つたものであつたが、その丈夫な襦袢ですら裾から白い綿が見えるほどに成つた。

作中の「岸本」すなわち藤村が、フランスの地にあつても、中沢臨川と深いかかわり合いがあつたことを示す叙述である。そして第二巻第五十章には、「吾儕の關係は肉の苦しみから出発したやうなものだが、どうかしてこれを活かしたいと思ふね。」この岸本の言葉は節子を悦ばせた。」と記され、「『お前のことを考へると、何と言ふか斯う道徳的な苦しみばかり起つて来て困つた。』私だつても……」と、「節子」との対話が記されることになる。この「岸本」と「節子」との対話は、二人の結び付きが世間の道徳とは相入れないものであることをはっきりと自覚している者同志の対話であると言えよう。

『新生』第二巻第七十一章には、「岸本は海外の諸国を遍歴して来た旅行記の一部に着手した。」と記されて、感想紀行文『海へ』の第五章に当たる「故国に帰りて」の筆が執られるはじめたことが示される。後に感想紀行文『海へ』にまとめられる五篇の紀行文は、刊行に際し大正六年四月に発表された「海へ」が巻頭におかれて、

藤村のフランス渡航体験にそつた時間的配慮が行われ、順序が整えられることになる。

そして次章第二卷第七十二章に次の言葉が記される。前にその一部を引用した一節であるが、あえて再度引用してみる。

岸本が浅草時代の終にあたる自分の生活をデカダンの生活として考へるやうに成つたのも、あたかもその生活の中に咲いた罪の華のやうに節子を考へるやうに成つたのも、それは彼が遠い旅に出てからずつと後のことであつた。(中略)冷然として自己の破壊に対する傷しい観察者の運命に想ひ到つた時でも、猶彼はデカダンとして自分を考へたくないと思つて居た。(中略)『死』を水先案内と呼びかけた人のやうな熱意を振り興して、この人生の航海に何かもつと新しいものを探り求めずには居られなかつた。

この叙述は「岸本」の「デカダンス」の自覚が明確になつた時点でのものであるが、しかし「岸本」は「浅草時代の終にあたる自分の生活」を当時は「デカダンの生活」とは考へていなかったことが述べられている。感想紀行文『海へ』の冒頭に記された、「心を起さうと思はゞ先づ身を起せ」、あるいは「左様だ、心を起さうと思はゞ、先づ身を起せ。」というニーチェの言葉は、藤村の渡仏当時の時間的秩序に従つて記されているものと見るべきであろう。

はるか後のものであるが、『『東方の門』ノート』の中の「雑記帳(ろ)」、「昭和十七年、四月十三日」の項に次のようにある。

ポオドレエルの「否定」

生を「悪」と見、自然を「悪」と見る

○

善悪の彼岸

藤村とこま子との関係が始まつた時期における、藤村とポオドレル、あるいはニーチェとの関係については述べて来た通りであるが、ここに記された「善悪の彼岸」はニーチェの『善悪の彼岸』を指しているものと思われる。ニーチェの『善悪の彼岸』は、『ツァラトゥストラはこう言つた』の注釈書として著わされたものである。「雑記帳(ろ)」の「善悪の彼岸」の記述は、『ツァラトゥストラはこう言つた』を指し示すものとして理解できるのではないだろうか。この記述の後を追つて見ると、「五月七日」の項には、

一 明治大帝の御生涯

(中略)

一 中沢臨川君の事業

とあり、次いで、「五月十一日」の項には、

一 乃木大将の殉死

とあつて、その次の「五月十七日」の項には、

一 曾て神戸をあとに国を出し時

〃

一 日本なしには生きられなかつた旅

と記されている。

この「雑記帳(ろ)」の記述は、藤村の渡仏前から、渡仏中の事柄を記したメモと読みとれる。ここで注意したいのは、「ポオドレエルの記述と、「善悪の彼岸」の記述とが併記されていることである。これは渡仏前の藤村の思念を確かめることができる点で注目されるべき記述だと思われる。

次に年譜の上から、藤村の渡仏前の事実を追つて見る。⁽⁵⁾

明治四十四年十一月三日、「緑蔭叢書」第三編として『家』

上・下二巻を自費出版。(上巻に中沢臨川が「序」を書き、口

絵は有島壬生馬が描き油絵を写真版にした。）

十二月初め、ボードレールやワイルドの書を読んだ。

明治四十五年一月三日から中沢臨川・小山内薫とともに平塚海岸・箱根塔ノ沢に保養に行く。

六月上旬、このころからこま子との関係が生じたらしい。

七月、明治天皇崩御。

中沢臨川についての記述を含めて、先の「雑記帳(ろ)」の記述と対応する点が見られるのは興味深い。

こうして渡仏前から渡仏中の事柄に関して見てみると、ボードレール、ニーチェ、中沢臨川との関わり合いが、一貫して見られることがわかる。『新生』第二巻第百八章に、「恐ろしく悲しい嵐の記憶がひし／＼と岸本の胸に迫つて来るやうに成つた。」と記されて、新生事件の発端の時期が回想され、次いで第百十章に入つて、「岸本は愛宕下の方に居て嫂の遺骸が火葬場の方へ送られたことを聞いた。それを聞いた日から、彼は自分の懺悔の稿を起した。」と記されて、『新生』の筆が執られ始めたことが示される。『新生』の発端の時期、すなわち、新生事件が起つた時期の藤村の思念として記されたと思われる、先の「雑記帳(ろ)」の記述にかかわる事柄が思い起こされる。

ところで、大正六年九月に発表された「燕のごとく帰る」、すなわち感想紀行文『海へ』の復航の第三章「燕のごとく帰る」の四に、次の記述がある。

チャイルド・ハロルドの詩人があの『巡礼』の中に歌つたあれは斯の鳥のことかと思はせるやうな海の鷗もわれ／＼の船に近く来て鳴いた。

「チャイルド・ハロルドの詩人」とは、バイロンのことである。

バイロンには近親相姦の事実があり、子供も一人もうけて、相手の女性に対する情熱は生涯失われなかった。⁽⁶⁾この「燕のごとく帰る」の叙述は、藤村がフランスから日本へ帰るその発端にあたる部分に見られるものである。そうした個所に、バイロンに関する事柄が、否定的でなく描かれたことは、藤村がこま子との愛を肯定的にとらえていることを示唆する。このことは、『新生』における「岸本」と「節子」との関係を考える時に、重要な事柄になると考えられる。

三

『新生』第二巻第百八十八章には、「岸本は節子に珠数を贈つた。」とあつて、次の叙述が示される。

斯の簡素な、しかし心を籠めた贈物はひどく節子を悦ばせた。(中略)後でよこした彼女の手紙の中には、大変好い物を貰つた、谷中へ帰つてからも幾度となくそつと掛けて見たといふことが書いてあつた。いづれ自分も男持に出来たのを探して、この返礼としたいとも書いてあつた。岸本はその節子を谷中の家の二階の三畳に置いて想像するのを楽しみに思つた。覚束ないながらも宗教へと辿り行かうとして居る彼女の手箱の中に、自分の贈つた熱い思慕のしるしを置いて考へるのも楽しみに思つた。この叙述を受けて、第二巻第百八十九章には、「節子」が「岸本」に返礼の「珠数」を送つたことが記されて次のように続く。

やがて岸本が節子の贈物を首に掛けた時は、自分ながら妙に改まつた心持に成つた。髪のある僧侶として自分を考へるには、彼の胸に躍る血潮はあまりに生々しく、彼の歩いて来た道はあまりに罪が深かつた。斯うした珠数でも胸の上に懸けて幻の

栖所のやうに今の生活を思ふやうな心と、夜も寐られぬほど血の涌くやうな心とが、彼には殆ど同時にあつた。

「岸本」と「節子」とが「珠数」を送り合つた時の心持ちが記されている。そして、第二巻第百十章に次の叙述が来る。

若い／＼と思つて居た節子が既に二十六にも成る。もし彼女の将来の望みが宗教生活を送るといふにあるならば、岸本は今迄毎月彼女を補助して来たやうに是から先も彼女の衣食に事を欠かさないやうにして、どうかして彼女の望みを遂げさせたいと思つた。

「節子」が、将来「宗教生活を送る」ことを望んでいることが記されている。そして第百十九章には次のように記される。「節子」が「父に与へた手紙」の一節である。

わが常に求むる真実を過ちの対象に見出したるは、一面より言へば不幸なるがごとくなれど、必ずしも然らず、過ちを変じて光あるものとなすべき向上の努力こそわが切なる願ひに候。

——おのが生きむとする道を宗教に扱ひたるは、一つは神を求むる心より、一つはかの歎きの底より浮びたる時にあたり恐るべき世の冷さに触れ、その悔悟も熱心も遂に多くの罪人等の自棄に陥る道に到るべきことを見出したるに外ならず候。宗教につきては、こゝにはわが志を申上ぐるにとゞめ申すべく候。

この個所には、「節子」が「おのが生きむとする道」を「宗教」に選ぼうとしている意味が示されている。そして、第二巻第百二十一章にも、「彼女はまた、今後お目に掛れるのは何時のことか、何年の後かと書いてよこした。その時になつて叔父さんに自分を見て貰ふのが何よりの楽しみだと書いてよこした。自分は毎日神に祈るやうになつたと書いてよこした。」とあつて、「節子」が将来へ向け

ての思いを綴る中で、「神に祈る」ようになったと記されている。

一方、「岸本」の心境は第二巻第百二十四章に次のように記される。

彼はよく節子にあのアベラルとエロイズの話をしたことを思ひ出した。彼女が未だこの下宿へ通つて来る頃には、あの僧侶と尼僧との伝説に關したものを見つけて置いてそれを彼女に読ました事を思ひ出した。あの巴里のペエル・ラセエズの墓地に静かな愛の涅槃のやうに眠つて居た二人の寝像。曾ては通りすがりの旅人のやうにして読んで来たあの羅馬旧教風な古めかしい御堂の横手に彫つてあつた文字。それを彼は眼に浮べて見て、終生變ることの無かつたといふあの僧侶と尼僧とのやうな精神的な愛情が、東洋風に肉を卑しむ心から果して生れて来るものだらうかとも考へるやうに成つた。岸本が待受けた夜明は、何もさう遠いところから白んで来るでもなく、自分の直ぐ足許から開けて行きさうに見えた。血から解き放され、肉から解き放されて行くことを感知する度に、暗かつた彼の心も次第に明るい方へ、明るい方へと出て行く思ひをした。

やや長い引用をしたが、仏教への関心をも含めて、「岸本」と「節子」とが、宗教への思いを通して二人の關係を考えて行こうとしていくことが示されている。「岸本」の場合は、それが、「アベラルとエロイズ」への関心となつていくことが顕著である。しかし、「岸本」と「節子」の場合を考へる時に注意したいのは、『新生』第二巻第七十二章に、「彼の墮ちて行つたデカダンスとは、中野の友人の言ふやうな『無為』の陥穽のそれでもなく、寧ろ結局狂人にも成つて終を告げるより外に仕方のないやうなそんな憂鬱な性質のものであつた。」とあつて、「彼はそんなことを人からも言はれ、

自分でもよくそんなことを考へて見たことを思ひ出した。」とあることである。「岸本」の「デカダンス」とは、『新生』序の章に記された「中野の友人」の場合とは別であることが明確にされている。こうして、『新生』という小説の題名が示す通り、宗教への志向が示される方向で、『新生』の世界は終わりを迎えることになる。この時注目しておかなければならないのは、第二巻第七十章に次のように記されていることである。長くなるがあえて引用してみる。

旅から岸本が国の新聞紙へあてゝ送つた折々の通信は節子の手で切抜にして保存してあつたくらゐで、その中に書いてあるアラアルとエロイズの名は節子の記憶にも残つて居た。まだ岸本はあの古いソルボンヌの礼拝堂などに結びつけて見て来た旅の印象を忘れることが出来なかつた。不思議にも死んだ物語が彼の胸に生きて来た。あのペエル・ラセエズの墓地で見えて来た古い御堂の内に枕を並べて眠つて居た僧侶ぶどうさんと尼僧あまさんとの寝像が物を言ふやうに成つた。この二人は終生変ることの無い精神的な愛情をかはしたとした文句の彫りつけて掲げてあつた白い大理石なぞはまだ彼の眼にあつた。彼はあの御堂の周囲まわりを廻りに廻つて立去るに忍びない思ひをして来たその自分の旅の心を節子に話した。あの御堂を圍繞とりまく鉄柵の内には秋海棠に似た草花が咲き乱れて居たことなぞをも話した。『さうだねえ。添ひ遂げられない人達は直ぐ破滅へ急いでしまふ。彼様いふ二人のやうに長く持ちこたへて行くなんてことは容易ぢやないね。』斯う彼は言つた。節子はまた熱心に彼の話を傾けて居た。この異国の物語は何となく彼女の精神を励ましたやうに見えた。彼はそれを嬉しく思つて、何かまたアラアルの事蹟に就いて書いたものでも手に入つたら、それを彼女に送らうと約束した。

そして『新生』第二巻の最終章、第四百十章の冒頭に、「わが心にあらず、御心のまゝに。」と書かれた「節子」の「岸本」に宛てた手紙が示され、「奈何いふ機会で人の目に触れなともかぎらないからと言つてよこしたその手箱の中には、岸本から送つた手紙や葉書のほんの用事を書いたやうなものまで大切にに入れてあつたが、唯珠数だけが無かつた。岸本はあの思慕のしるしとして彼の方から送つたものだけを節子が旅に持つて行くことを知つた。」と記されて最終部分が来る。第二巻第七十章に示された、「秋海棠に似た草花」の叙述に照応するように次に記されることになる。

節子の残して置いて行つた秋海棠の根が塀の側に埋めてあつた。『遠き門出の記念として君が御手にまゐらす。朝夕培ひしこの草に憩ふ思ひを汲ませたまふや。』この節子の書き残した言葉が岸本の氣に成つた。引越早々の混雑の中で、彼は四つの根を庭に埋めて置いたが、その埋め方の不確実ふたしかなのが氣に成つた。何となくその根のつくと、つかないのが、これから先の二人の生命いのちに関係でもあるかのやうに思はれて成らなかつた。試みに掘出して見ると、毛髪でも生えたやうに氣味の悪い秋海棠の黒ずんだ根が四つとも土の中から転がつて出て来た。(中略)岸本はその根を深く埋め直して、やがてやつて来る霜にもいたまないやうにした。節子はもう岸本の内部なかに居るばかりでなく、庭の土の中にも居た。

大正八年一月一日『新生』第一巻が春陽堂から刊行され、同年十二月二十八日第二巻が同じく、春陽堂から刊行された。藤村は大正九年一月一日、『東京朝日新聞』に、「胸を開け」という文章を発表し、「ニイチェといひ、ベルグソンといひ、タゴオルといひ、あゝいふ人達の仕事が丁度夏の夜の両国の煙火はなびのやうに、皆の心の空に

輝いた日もあつた。」と述べた。『新生』を刊行した後の藤村が、新生事件当時の、そして自らもその中に身を置いた時代思潮について思いをめぐらしていることが示されている。『新生』の第二巻第七十一章にも記されたように、「私達の時代に濃いデカダンスをめぐけて鶴嘴を打ち込んで見るつもりであつた。」と藤村が後に述べた『新生』は、「岸本」と「節子」の愛の救いの方向に宗教との関わりを示しながらその世界を閉じることになった。

注

- (1) 和田謹吾著『島崎藤村』。
- (2) 「『新生』論—発端としての藤村の思念について—」（『信州大学教養部紀要人文科学第二十二号』昭和六十三年二月）。
- (3) 「『新生』論—「岸本」の「フランス」—」（『信州大学人文学部ヨーロッパ精神史における愛の諸相—特定研究報告書—』一九八一年三月）。
- (4) 阿毛久芳「『海へ』」（『国文学解釈と鑑賞第六十七巻十号』平成十四年十月号）。
- (5) 伊東一夫編『島崎藤村事典改訂版』による。
- (6) (2)に同じ。